

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 12 月 19 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	井上 漱太

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
西表島、沖縄県
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
西表実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 11 月 7 日 ~ 平成 30 年 11 月 11 日 (5 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>沖縄県西表島で開催された西表実習に参加した。本実習では大きく分けて3つの活動をおこなった。トレッキング、カヤック、シュノーケリングである。私はこの実習に参加するのは2回目だった。まず、最初の活動として、ボートで浦内川の上流に向かい、下船後、マリウドゥの滝、カンピレーの滝を目指してトレッキングをおこなった。約1時間歩いたところで、最終目的地のカンピレーの滝に到着した。道中、さまざまな植物と2種類のトカゲを発見した。翌日は西田川でカヤックを漕いだ。西田川はフィールドステーションからほど近いところに位置し、川の両側にはマングローブ林が広がっている。また、海水と真水が混じり合っており、川の深度によってそれぞれの水の層が形成されており、それを温度の違いをもって感じる事ができ大変興味深かった。潮位の変化が引き起こす劇的な光景の変化も興味深かった。カヤックを上流に向かって漕ぎ始めた時は潮位が高く、余裕を持って漕ぐことができたが、復路では徐々に潮位が下がってきており、最終的にはカヤックを引っ張って足で歩くことになった。当たり前のことではあるが、カヤックの方が断然楽で、フィールドを進む際の道具の重要性を身をもって感じた。これは笹ヶ峰実習で使用した雪上をスキーで歩く体験にも通じるものがあると思う。潮位が下がったことで干潟が出現しており、おびただしい数のコメツキガニを見ることができた。前回の西表実習(私が参加した2年前)では、今回のような大きな変化を見ることはできなかった。やはり、同じフィールドでも、季節によって、天候によって、様々なフィールドの姿を見せてくれるものだ。カヤックの翌日はシュノーケリングをおこなった。水は透き通っており、多数の魚を見ることができた。ウミヘビも2種類観察することができた。野生のウミヘビを間近で観察したのは初めてのことであり、少し恐怖心はあったもののそれを上回る好奇心があった。</p> <p>今回の西表実習は内容もさることながら、私にとっては2回目ということがもう一つの大きなポイントである。1回目のときには、覚えきれなかった植物名とその特徴も、2回目となると少しは多く覚えられる。また、2回目は1回目と比較もできる。私が1回目にみたものは、一部に過ぎず、そのフィールドの全てではないということが深く実感できた。頭では理解しているつもりでも、実際に見て、歩くと、印象は俄然違ってくる。多様性という単語には同じものが見せる異なる姿という意味も含めて考えなければならないと感じた。</p> <p>熱帯は多くの種を育む生態系で、地球のなかでも非常に重要なエリアなのは間違いない。しかし、残念ながら私たちが普通に研究活動をおこなっている限り、そこに訪れる機会はそう多くはない。私たちがマクロ的な視点から動物に関する研究に携わっている限り、保全、多様性という単語と別れることができないだろう。そのゆえ、幅広い地域、環境、種の知識を取得することは必須である。西表実習のような機会を通して、実際に歩く経験をいうのは、何物にも代えがたい貴重な経験である。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



6. その他 (特記事項など)

まず、最初に琉球大学の先生方には、実習を通して内容から生活まで非常に手厚いサポートをしていただきました。ステーションのスタッフの方々にも生活を助けていただきました。さらに、本実習を企画し経済的にサポートしていただいた PWS に感謝申し上げます。